

ホフマンの心理的分離質問票の妥当性の検討

上 地 雄一郎・上 地 玲 子*

An Evaluative Study of Hoffman's Psychological Separation Inventory

KAMIJI Yuichiro and KAMIJI Reiko

Abstract : The Psychological Separation Inventory (Hoffman, 1984) was translated into Japanese, and several items inadequate for Japanese culture were revised. The Japanese version of the Psychological Separation Inventory (JPSI) was administered to 201 university students. 44 of the original items were selected according to their item-total correlations. On the basis of factor analysis of these 44 items, three factors were extracted and named attitudinal independence, functional/emotional independence and conflictual independence. Validity of the JPSI was evaluated through its correlation with Yamamoto's scale of anxiety and Sakano & Tojo's scale of self-efficacy. Multiple regression analysis by means of these scales revealed that functional/emotional and conflictual independence from the mother led to a decrease in anxiety and increase in self-efficacy but functional/emotional independence from the father did not. The latter result suggested that emotional attachment to the father provided adolescents with security and self-reliance in late adolescence.

Key Words : Psychological Separation Inventory, factor analysis, validity

問 題 と 目 的

青年期における親からの心理的分離に関しては、事例研究などの質的研究を通して論じられることが多く、質問紙を用いた調査的研究は十分には行われていない。青年期の心理的分離を測定する尺度としては、Hoffman (1984) の心理的分離質問票 (PSI) や Levine ら (1986, 1993) の 青 年 期 分 離 ・ 個 体 化 テ ス ト (SITA) などがある。PSI は、対父親・対母親各 69 項目からなり、青年期後期の親からの心理的分離を以下の 4 つの側面で測定する。①機能面での自立：親の助けなしに個人的・実際的問題を処理できるようになること。②態度面での自立：独自の信念、価値観、態度をもつこと。③情緒面での自立：親に対して、承認、共同作業、親しさ、情緒的支えを過度に求めなくてもよくなること。④葛藤面での自立：親に対して、罪悪感、不安、不信、責任、抑制、恨み、怒りなどを過度

に感じなくてもよくなること。また、Levine らの SITA は、Mahler の分離・個体化理論に基づく 86 項目の質問紙であり、1993 年版は、分離不安、呑み込まれ不安、保護希求、仲間との密着、教師との密着、練習一映し返し、欲求否認、拒否の予期、健康な分離という 9 下位尺度から構成されている。PSI について、上地ら (1987)、中丸ら (1987) は、日本版 PSI を作成し因子構造の検討を行ったが、この研究は信頼性・妥当性の検討が十分には行われていない。SITA については、高橋 (1989) が 1986 年版に基づいて日本版を作成し、因子分析の結果 7 因子を抽出しているが、この研究も妥当性の検討が十分ではない。

日本においては、最近、「青年期の心理的離乳」というテーマのもとに発達心理学的研究が行われるようになってきている。たとえば、小沢・湯沢 (1989) は、「心理的離乳尺度」を作成し、因子分析を行った結果、「親子の対立、親への甘え、親への信頼感、親から子への世代交替、親から仲間への離脱」という 5 因子を抽出した。しかし、この尺度は母親と父親をこみにして質問する形式である点が問題である。落合

*岡山短期大学

(1995)は、青年期の心理的離乳過程について独自の段階説を提唱し、落合・佐藤(1996)では、これに基づいて青年期の親子関係を調べる質問票を作成し、因子分析を行った結果、「親が子を抱え込む関係、親が子を危険から守る関係、子が困ったときには親が支援する関係、親が子と手を切る関係、子が親から信頼・承認されている関係、親が子を頼りにする関係」という6因子を抽出している。しかし、この質問票は尺度構成の手続きを踏んだものではなく、妥当性の検討は行われていない。小高(1998)は、上記のような親子関係に関する既存の質問紙に基づいて独自の質問票を作成し、因子分析を行い、「親からのポジティブな影響の因子、親との対立の因子、親への服従の因子、親との情愛的絆の因子、一人の人間として親を認知する因子」という5つの因子を抽出している。ただ、これらの質問票や尺度はいずれも興味深いものではあるが、親からの心理的分離の程度に焦点を当てたものではない。

したがって、心理的分離の程度を測定するとなると、HoffmanのPSIやLevineのSITAが適している。しかし、SITAは親子関係以外についての質問を含んでおり、PSIには、筆者らの先行研究の結果、以下のような問題点が見いだされた。まず、PSIでは、価値観が親と似ており、親と親密であれば自立度が低いということになるが、価値観の類似や親密さと心理的自立を単純に結びつけることには疑問が残る。実際、Hoffman(1984)を含む複数の研究において、親と価値観が似ているほど適応が良好であるというような結果が見出されている。また、態度、機能、情緒、葛藤という下位尺度の分類が適切なかどうか問題である。そこで、本研究では、上地ら(1987)・中丸ら(1987)を引き継ぐ形で日本版PSIの項目分析・因子分析と信頼性・妥当性の検討を試みたので、その結果を報告する次第である。

方 法

1. 日本版 PSI の項目分析と信頼性の検討

かつて筆者らが作成した日本版PSIの項目のうち、下宿生でないと答えにくい項目を自宅通学生でも答えられるように修正し、対母親・対父親各69項目からなる質問紙を作成する。各項目の回答の分布を検討し、回答が偏る項目を削除する。残った項目を、Hoffmanの分類にしたがって、態度面での自立、機能面での自立、情緒面での自立、葛藤面での自立の各下位

尺度に分け、各下位尺度ごとに、全体得点と各項目得点の相関係数を用いてI-T分析を行う。また、全項目に対して因子分析を行い、項目のまとまりを検討する。また、各下位尺度ごとにクロンバックの α 係数を算出する。

2. 妥当性の検討

以下の3つの方法によって日本版PSIの妥当性を検討する。なお、男女により親子関係の影響が異なると思われることから、この分析は男女別に行うことにする。

(1) 不安との関連の検討

親に依存していたり、親との間に葛藤を抱えたりしているほど、親の承認や支えなしに何かを行うことに不安を感じやすいであろう。山本(1992)は、青年期の不安を2つに分け、自己実現を促進するような不安を「成長不安」、自己実現を妨げるような不安を「抑制不安」と呼び、両者を測定する25項目の不安尺度を作成している。山本の分類を用いるなら、親から心理的に分離できていない者ほど抑制不安が高いことが予想される。PSIとともに山本の不安尺度のうち抑制不安を測定する15項目(6件法)を実施し、PSIの各下位尺度を説明変数、抑制不安を基準変数とする重回帰分析を行う。

(2) 自己効力感(セルフ・エフィカシー)との関連の検討

親から心理的に分離しているほど、親の期待や意向から独立してさまざまなことを試み、経験していく結果として、自己効力感や自己評価が高まることが予想される。自己効力感を測定するのに適切な尺度として坂野・東條(1993)の「セルフ・エフィカシー尺度」(26項目;2件法)を用い、PSIの各下位尺度を説明変数、セルフ・エフィカシー尺度を基準変数とする重回帰分析を行う。

結 果 と 考 察

1. 項目分析・因子分析と信頼性の検討

日本版PSIを大学生・短期大学生201名(男子103名、女子98名)に実施し、PSIの回答の分布の偏りが大きい項目を削除した。次に、PSIの下位尺度ごとに、各項目得点と(それを除く)全体得点との相関を用いてI-T分析を行い、相関の低い(0.40未満)項目を削除した。そして、対母親項目と対父親項目が一致するように項目を選択した結果、態度面自立14項

表1 PSI 母親項目の因子分析結果（主成分分解；ヴァリマックス回転）

尺 度 項 目	因子1	因子2	因子3	共通性
M 3 母とあまり長く会っていないと母が恋しくなる。	0.74	0.20	-0.03	0.58
M 67 私は母がいなかったらやっていけるかどうかかわからない。	0.72	0.09	-0.03	0.53
M 33 母と長い間離れて暮らすことになったら、時々むしように母に会いたくなるだろう。	0.72	0.24	-0.08	0.58
M 10 私は困難なことがあると母に頼んで助けてもらおうとする。	0.70	0.19	-0.03	0.53
M 65 私は何かがうまくいかなくなると母に頼る。	0.70	0.23	0.17	0.57
M 45 苦しい状況に陥った時、私は母にどうすべきか相談する。	0.67	0.28	-0.06	0.53
M 15 私は、自分個人の問題を解決する時、母に助けてくれるように頼むことがよくある。	0.64	0.17	-0.07	0.45
M 17 母から離れていると孤独を感じる。	0.62	0.15	-0.02	0.41
M 11 母は私にとってこの世で一番大切な人だ。	0.62	0.28	-0.25	0.53
M 53 私は時々母に頼りすぎていると思う。	0.61	0.14	0.18	0.42
M 40 長期アルバイトの仕事を決める時には、私は母に相談する。	0.61	0.03	0.24	0.43
M 13 将来母と離れて暮らすことになっても、たびたび母に会いに行こうと思う。	0.60	0.15	-0.22	0.43
M 41 物事を決める時には、それを母が許してくれるかどうか考える。	0.59	0.10	0.25	0.42
M 50 わからない事が生じた時に、私はたいてい母が決めたとおりにする。	0.59	0.03	0.25	0.41
M 35 休暇中の旅行などの計画を立てる時に、私は母に相談するのが普通だ。	0.57	0.14	0.06	0.35
M 30 私がお金の使い方を考えたりする時、母は一緒に考えてくれる。	0.49	0.30	-0.09	0.34
M 47 母は私の最良の友である。	0.44	0.41	-0.22	0.40
M 64 国家の防衛についての私の考えと母の考えは似ている。	0.17	0.81	0.08	0.69
M 24 政治的なことについての私の考えと母の考えは似ている。	0.09	0.79	-0.01	0.63
M 44 環境保護についての私の考えと母の考えは似ている。	0.09	0.78	0.06	0.61
M 69 精神的病いのある人に対する私の態度と母の態度は似ている。	0.07	0.76	0.03	0.58
M 49 宗教についての私の考えと母の考えは似ている。	0.22	0.69	0.04	0.52
M 54 人が死後どうなるかについての私の考えと母の考えは似ている。	0.23	0.68	0.07	0.52
M 34 誠実さとは何かについての私の考えと母の考えは似ている。	0.27	0.68	-0.05	0.53
M 14 女性がどうあるべきかについての私の考えと母の考えは似ている。	0.30	0.64	-0.07	0.51
M 19 男性がどうあるべきかについての私の考えと母の考えは似ている。	0.25	0.64	-0.12	0.48
M 29 子どもをどう育てたらいいのかについての私の考えと母の考えは似ている。	0.38	0.63	-0.22	0.59
M 4 部落差別・人種差別に対する私の考えと母の考えは似ている。	0.16	0.60	-0.09	0.39
M 59 性（セックス）についての私の考えと母の考えは似ている。	0.23	0.58	-0.04	0.39
M 39 一人住まいに対する私の考えと母の考えは似ている。	-0.04	0.58	-0.17	0.36
M 9 ひわいなことに対する私の態度と母の態度は似ている。	0.27	0.48	0.01	0.31
M 58 母が私を批判すると腹が立つ。	0.12	0.00	0.72	0.54
M 38 母が私のことにいちいち指図するのはとてもいやだ。	-0.01	-0.07	0.71	0.51
M 32 母が私をもっと大人として扱ってくれたらいいのと思う。	0.05	0.01	0.71	0.50
M 21 母が私を自分の思いどおりにあやつろうとしないでくれたらいいのと思う。	-0.04	-0.07	0.71	0.50
M 68 母からこうしなさいと言われると腹が立つことがある。	0.11	0.01	0.71	0.51
M 36 私はしばしば母の事で腹を立てる。	-0.01	-0.04	0.70	0.49
M 2 時々母の存在が重荷になる。	0.02	-0.09	0.67	0.46
M 18 母がこんなに過保護でなかったらいいのと思う。	0.01	-0.06	0.67	0.45
M 48 私は些細なことで母と言い争う。	0.02	-0.04	0.66	0.43
M 52 母は時々私を困惑させる。	-0.03	-0.01	0.64	0.41
M 6 私はいつでも母と対立しているように感じる。	-0.19	0.06	0.60	0.40
M 27 母は私に期待しすぎている。	0.04	0.00	0.57	0.32
M 22 母が私のことを自分の楽しみにしないでくれたらいいのと思う。	0.03	-0.07	0.57	0.33
固 有 値	7.49	7.10	6.30	20.90
寄 与 率	17.03	16.14	14.32	47.49

M で始まる数字は、元の項目番号

目、機能面自立8項目、情緒面自立9項目、葛藤面自立13項目の合計44項目が残された。各下位尺度ごとに信頼性係数（クロンバックの α ）を算出すると、0.85～0.94の範囲に収まったので、信頼性については十分であると思われる。

さらに、各下位尺度のまとまりを確認するために、対父親項目と対母親項目それぞれについて因子分析（主成分分解；ヴァリマックス回転）を行った。まず、固有値1以上と指定して、因子分析を行い、次に因子数3～5の範囲でバリマックス回転を用いて因子分析を繰り返した。その結果、対母親項目においても、対父親項目においても、4因子目からの固有値の落ち込

みが大きく、第4因子に負荷する項目も少ないため、3因子が妥当と判断された。項目のまとまりを検討すると、表1・2のように、態度面での自立と葛藤面での自立に属する諸項目はそれぞれ一つの因子としてまとまったが、機能面自立と情緒面自立に属する諸項目は一つの因子として合体してしまった。これは、Hoffman（1984）の分類とは異なり、因子的には機能面での自立と情緒面での自立は区別できないという結果である。表3に示した下位尺度間相関においても、機能面での自立と情緒面での自立は0.70以上の高い相関を示しており、因子分析の結果と符合する。

各下位尺度の平均値と標準偏差を男女別に表4に示

表2 PSI 父親項目の因子分析結果(主成分分解; ヴァリマックス回転)

尺度項目	因子1	因子2	因子3	共通性
F 64 国家の防衛についての私の考えと父の考えは似ている。	0.81	0.27	0.04	0.73
F 34 誠実さとは何かについての私の考えと父の考えは似ている。	0.80	0.22	-0.10	0.69
F 44 環境保護についての私の考えと父の考えは似ている。	0.79	0.16	-0.04	0.66
F 19 男性がどうあるべきかについての私の考えと父の考えは似ている。	0.78	0.22	-0.13	0.67
F 24 政治的なことについての私の考えと父の考えは似ている。	0.77	0.33	-0.05	0.71
F 69 精神的病いのある人に対する私の態度と父の態度は似ている。	0.76	0.13	0.07	0.60
F 4 部落差別・人種差別に対する私の考えと父の考えは似ている。	0.75	0.16	-0.09	0.60
F 29 子どもをどう育てたいのかについての私の考えと父の考えは似ている。	0.74	0.32	-0.17	0.67
F 14 女性がどうあるべきかについての私の考えと父の考えは似ている。	0.72	0.30	-0.11	0.63
F 54 人が死後どうなるかについての私の考えと父の考えは似ている。	0.72	0.14	-0.02	0.54
F 49 宗教についての私の考えと父の考えは似ている。	0.72	0.15	0.02	0.54
F 59 性(セックス)についての私の考えと父の考えは似ている。	0.63	0.15	-0.07	0.42
F 39 一人住まいに対する私の考えと父の考えは似ている。	0.59	0.16	-0.12	0.39
F 9 ひわいなことに対する私の態度と父の態度は似ている。	0.45	0.25	0.14	0.28
F 65 私は何かがうまくいかなくと父に頼る。	0.23	0.76	0.01	0.64
F 15 私は、自分個人の問題を解決する時、父に助けてくれるように頼むことがよくある。	0.21	0.75	-0.11	0.61
F 10 私は困難なことがあると父に頼んで助けてもらおうとする。	0.19	0.74	-0.04	0.59
F 33 父と長い間離れて暮らすことになったら、時々むしろ父に会いたくなるだろう。	0.22	0.72	-0.02	0.56
F 17 父から離れていると孤独を感じる。	0.11	0.69	-0.01	0.49
F 3 父とあまり長く会っていないと父が恋しくなる。	0.29	0.68	-0.02	0.55
F 45 苦しい状況に陥った時、私は父にどうすべきか相談する。	0.32	0.67	-0.08	0.56
F 53 私は時々父に頼りすぎていると思う。	0.12	0.65	0.09	0.44
F 35 休暇中の旅行などの計画を立てる時に、私は父に相談するのが普通だ。	0.13	0.63	0.05	0.42
F 50 わからない事が生じた時に、私はたいてい父が決めたとおりにする。	0.09	0.63	0.12	0.41
F 67 私は父がいなかったらやっていけるかどうかかわからない。	0.09	0.62	-0.06	0.40
F 13 将来父と離れて暮らすことになっても、たびたび父に会いに行こうと思う。	0.22	0.60	-0.18	0.44
F 11 父は私にとってこの世で一番大切な人だ。	0.27	0.59	-0.20	0.46
F 41 物事を決める時には、それを父が許してくれるかどうか考える。	0.13	0.58	0.26	0.43
F 30 私がお金の使い方を考えたりする時、父と一緒に考えてくれる。	0.21	0.58	0.09	0.39
F 47 父は私の最良の友である。	0.34	0.52	-0.23	0.44
F 40 長期アルバイトの仕事を決める時には、私は父に相談する。	0.10	0.50	0.15	0.29
F 36 私はしばしば父の事で腹を立てる。	-0.05	-0.13	0.83	0.70
F 68 父からこうしなさいと言われると腹が立つことがある。	-0.07	-0.02	0.79	0.64
F 2 時々父の存在が重荷になる。	-0.01	-0.09	0.78	0.61
F 21 父が私を自分の思いどおりにあやつろうとしないでくれたらいいのと思う。	-0.07	0.10	0.77	0.61
F 58 父が私を批判すると腹が立つ。	-0.05	0.00	0.75	0.57
F 38 父が私のすることにいちいち指図するのはとてもいやだ。	-0.04	0.01	0.73	0.54
F 22 父が私のことを自分の楽しみにしないでくれたらいいのと思う。	0.03	0.12	0.73	0.55
F 6 私はいつでも父と対立しているように感じる。	-0.08	-0.24	0.73	0.60
F 52 父は時々私を困惑させる。	-0.03	-0.02	0.70	0.49
F 32 父が私をもっと大人として扱ってくれたらいいのと思う。	-0.11	0.03	0.64	0.43
F 18 父がこんなに過保護でなかったらいいのと思う。	-0.10	0.13	0.62	0.41
F 48 私は些細なことで父と言い争う。	-0.08	-0.06	0.62	0.40
F 27 父は私に期待しすぎている。	0.09	0.10	0.59	0.36
固 有 値	8.11	7.95	7.10	23.16
寄 与 率	18.44	18.06	16.13	52.63

Fで始まる数字は、元の項目番号

した。母親からの態度面、機能面および情緒面での自立においては、男女差が見られ、女子の方が有意に低い得点を示した。これは、女子の方が母親との結びつきが強く、また社会・文化的にもそれを許容されることから、当然の結果とみなせるであろう。また、父親からの葛藤面での自立においても男女差が見られ、女子の方が有意に低い得点であった。後に述べる妥当性分析においても、青年期後期の女子の場合、むしろ父親と結びついていることの重要性が高いのではないかとという結果が得られた。したがって、女子に父親との葛藤が多いという結果も、一般的に父親がこの時期の女子の父親希求に十分に応えられていないことから女

表3 心理的分離尺度の下位尺度間相関

		機能面自立	情緒面自立	葛藤面自立
対母親	態度面自立	0.48**	0.52**	-0.09
	機能面自立		0.75**	0.07
	情緒面自立			-0.05
対父親	態度面自立	0.50**	0.52**	-0.12
	機能面自立		0.73**	-0.01
	情緒面自立			-0.08

**p<.01

子の葛藤が激しくなっているのかもしれない。

表4 PSIの得点と性差(t検定)

	回答者		態度面での自立		機能面での自立		情緒面での自立		葛藤面での自立	
	性別	人数	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
対母親	男子	103	54.34	10.50	34.68	5.00	35.80	5.99	51.03	9.45
	女子	98	46.84	11.18	27.59	5.11	27.71	7.15	48.67	10.49
対父親	男子	103	54.57	12.76	35.33	5.90	36.70	7.45	54.89	9.63
	女子	98	54.39	11.01	34.20	4.93	34.85	6.68	48.71	12.42
性 差			対母親 $p<0.01$		対母親 $p<0.01$		対母親 $p<0.01$		対父親 $p<0.01$	

表5 抑制不安および自己効力感に対する心理的分離の影響(重回帰分析)

心理的分離質問票			男 子		女 子	
			抑制不安	自己効力感	抑制不安	自己効力感
β 値	対母親	態度面自立	-0.06	0.07	0.10	-0.21
		機能・情緒面自立	-0.20	0.19	-0.32**	0.51**
		葛藤面自立	-0.29**	0.30**	-0.17	0.30**
	対父親	態度面自立	0.04	-0.20	-0.04	0.03
		機能・情緒面自立	-0.04	-0.24	0.21	-0.38**
		葛藤面自立	-0.15	0.07	-0.27*	0.01
重決定係数 R^2			0.22	0.23	0.21	0.29
F 値			4.35**	4.83**	4.10**	6.05**

* $p<.05$ ** $p<.01$

2. 妥当性の検討

PSIの項目分析で用いたのと同じ対象に、山本の抑制不安尺度と坂野・東條(1993)のセルフ・エフィカシー尺度を実施した。そして、PSIの各下位尺度得点を説明変数、抑制不安得点および自己効力感得点を基準変数とする重回帰分析を行った。上にも述べたように、PSIの対母親項目においても、対父親項目においても、「機能面での自立」と「情緒面での自立」の下位尺度は1つの因子にまとまり、互いに相関が高く($r=0.70$ 以上)、さらに、このそれぞれの尺度が抑制不安や自己効力感と弱い相関を示していることから、重回帰分析において多重共線性の問題が発生すると思われる。そこで、機能面での自立と情緒面での自立の得点を合計し、「機能・情緒面での自立」という合成変数を作成し、これを説明変数として用いた。重回帰分析の結果を表5に示す。

(1) 男子の結果

抑制不安については、 $R^2=0.22$, $F=4.35$ であり、重回帰式は1%水準で有意であった。各説明変数の標準偏回帰係数 β をみると、母親からの葛藤面での自立が負の方向に1%水準で有意であった。また、有意ではないものの、母親からの機能・情緒面での自立の β 値がこれに次いで高かった。いずれも標準偏回帰係数の値がマイナスであるから、母親との関係に葛藤が少ないほど、また母親から機能的・情緒的に自立している

ほど抑制不安も低くなるという結果である。

自己効力感については、 $R^2=0.23$, $F=4.83$ であり、重回帰式は1%水準で有意であった。各説明変数の標準偏回帰係数 β をみると、母親からの葛藤面での自立が正の方向に1%水準で有意であった。また、有意ではないが、母親からの機能・情緒面での自立がこれに次ぐ高さであった。母親との関係に葛藤が少ないほど、また母親から機能・情緒的に自立しているほど自己効力感も高くなるという結果である。

このように、抑制不安についても自己効力感についても、まずは母親との関係に葛藤が少ないこと、次に母親から機能・情緒的に自立していることが一定の影響を与えていると思われる。

男子の場合、思春期・青年期に母親との密着関係を解き、適切な距離を築くことが重要な発達課題である。母親との間に葛藤が多いということは、この発達課題を達成していないことを窺わせる。したがって、母親との葛藤が少ないことが抑制不安の低さや自己効力感の高さと関連していたことは、妥当な結果であると考えられる。

ただ、ここで興味深いのは、有意ではないものの、父親からの態度面での自立および機能・情緒面での自立の標準偏回帰係数が負の値になっていることである。つまり、父親と態度面で似ており、父親に機能的・情緒的に依存しているほど自己効力感が高くなると

いう関係がわずかながら見られるということである。

(2) 女子の結果

抑制不安については、 $R^2=0.21$, $F=4.10$ であり、重回帰式は1%水準で有意であった。各説明変数の標準偏回帰係数 β をみると、母親からの機能・情緒面での自立と父親からの葛藤面での自立が負の方向に有意であった。母親から機能・情緒面で自立しており、父親と葛藤の少ない関係を保っているほど抑制不安は少ないと考えられる。女子の場合も、有意ではないものの、父親からの機能・情緒面での自立の β 値がプラスになっている。つまり、父親に機能・情緒的に依存できているほど抑制不安は下がるという関係がわずかに見られるということである。

次に、自己効力感については、 $R^2=0.29$, $F=6.05$ であり、重回帰式は1%水準で有意であった。各説明変数の標準偏回帰係数 β をみると、母親からの機能・情緒面での自立と葛藤面での自立が正方向に有意であった。つまり、母親から機能・情緒的に自立しており、母親と葛藤の少ない関係を維持しているほど自己効力感が高まるということである。ところが、父親との関係では、父親からの機能・情緒面での自立の β 値が負の方向に有意であった。つまり、父親に機能・情緒的に依存しているほど自己効力感が高いということである。

(3) 総合的考察

男女の結果を総合すると、母親との関係については、母親から機能・情緒的に自立し、葛藤の少ない関係を営んでいるほど、抑制不安や自己効力感が高まると思われる。ところが、父親との関係では、むしろ父親に機能・情緒的に依存できる方が抑制不安は低く、自己効力感が高くなるのではないかと考えられた。とくに、女子の場合に、父親への機能・情緒的依存と自己効力感との間に正方向の関連が見られるのが興味深い。この結果は意外なようにも思えるが、筆者らの過去の研究においてもこれと類似の結果が見られたことから、この結果は青年期後期の親子関係の特質を反映しているとも考えられる。青年期後期は、父親の重要性が高まる時期だと考えられる。なぜなら、社会的・経済的自立という発達課題を前にして、内的な支えとして父親の重要性が増大すると思われるからである(上地, 1992; 鶴田, 1994)。

ま と め

以上のように、日本版 PSI の因子分析を行った結

果、機能面での自立と情緒面での自立は因子的には区別できないことが判明した。そこで機能面での自立と情緒面での自立の尺度を合体させ、機能・情緒面での自立という下位尺度を作成し、態度面の自立、機能・情緒面での自立、葛藤面での自立という3つの下位尺度で分析を行った。これらの尺度と、抑制不安および自己効力感との関連を検討した結果、機能・情緒面での自立と葛藤面での自立が抑制不安と自己効力感に多少の影響を与えていることが示唆された。ただ、葛藤面での自立の下位尺度については、得点が高いこと、つまり葛藤が少ないことを肯定的に解釈してよいと思われるが、機能・情緒面での自立の下位尺度については、得点が高いほど好ましいとはいえない場合があることが示唆された。PSI では、態度面で親と似ておらず、機能・情緒面で親に依存しておらず、親との葛藤が少ないほど、自立が進んでいるとみなす。しかし、態度面に関していえば、政治・社会・宗教などに対する態度が単に親と違うことだけが自立の指標であろうか。重要なことは、親の態度を無批判に取り入れているだけなのか、自分なりに受け取り直したのかということである。後者の場合に、結果的に親と態度が似ていても、自立していないということにはならないであろう。今回の研究でも、妥当性の基準として取り上げた変数と態度面の自立との間には、あまり関連が見られなかった。さらに、文化差や時間経過によるのかもしれないが、態度面での自立の下位尺度に属する項目に対して、日本の大学生には「親とそういう話をしたことがない」とか「親がどう考えているか分からない」といった反応を示す者が少なくない。この下位尺度の意味については根本的な検討が必要であると思われる。次に、機能面および情緒面での自立に関しても、この下位尺度の得点が高いことが常に肯定的意味を持つとは限らない。今回の研究の結果からも、とくに青年期後期の女性においては父親への機能的・情緒的依存が肯定的効果をもたらしている可能性が見いだされた。逆に、親への機能的・情緒的依存を拒否することが、実は親子関係の大きな問題に基づいている場合がある。愛着理論の内的作業モデルでいえば、「回避型」avoidant type に属する人がその一例である。重要なことは、親に対して適度な依存ができるということであり、親からまったく隔絶することではないであろう。

文 献

Hoffman, J. F. (1984): Psychological separation of late ado-

- lescents from their parents. *Journal of Counseling Psychology*, **31**(2), 170-178.
- 上地雄一郎ら (1987)：大学生の心理的自立度の測定 (1)：Hoffman の尺度の適用と検討. 総合保健科学, **3**, 63-68.
- 上地雄一郎 (1992)：父親コンプレクスからみた神経症男子学生の問題. 学生相談研究, **13**(1), 9-17.
- 小高 恵 (1998)：青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究. 教育心理学研究, **46**(3), 333-342.
- Levine, J. B. *et al.* (1986)：The Separation-individuation test of adolescence. *Journal of Personality Assessment*, **50**(1), 123-137.
- Levine, J. B. *et al.* (1993)：Psychometric properties of the Separation-individuation test of adolescence within a clinical population. *Journal of Clinical Psychology*, **49**(4), 492-507.
- 中丸澄子ら (1987)：大学生の心理的自立度の測定 (2)：Hoffman の尺度構成についての補足的検討. 総合保健科学, **3**, 69-77.
- 落合良行 (1995)：心理的離乳への5段階過程仮説. 筑波大学心理学研究, **17**, 51-59.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996)：親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, **44**(1), 11-22.
- 小沢一仁・湯沢理恵子 (1989)：青年期の心理的離乳と同一性-心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関連-. 帝京学園短期大学紀要, **3**, 63-74.
- 坂野雄二・東條光彦 (1993)：セルフ・エフィカシー尺度. 上里一郎監修：心理アセスメント, 西村書店, 478-489.
- 高橋蔵人 (1989)：青年期における分離個体化に関する研究-質問紙調査による考察-. 心理臨床学研究, **7**(2), 4-14.
- 鶴田和美 (1994)：大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味. 心理臨床学研究, **12**(2), 97-108.
- 山本誠一 (1992)：青年期における不安の二側面に関する実証的検討. 心理学研究, **63**(1), 8-15.